



納税協会

No.4

# ダツクナヨリ

謎めいた明智光秀の人生

戦国武将の健康術

[表紙写真]信楽焼(滋賀県甲賀市)

# 戦国武将の健康術

## 謎めいた明智光秀の人生 —インテリ・イケメンの最期—



誰もがその名を知っているのに、出自についてはほとんどわかっていない武将といえば、2020年大河ドラマの主役に大抜擢された明智光秀ではないでしょうか。

光秀の肖像画と伝わるものは一枚しか残っていません。この光秀像を見ると、端正な顔に切れ長の目であることがわかります。福知山・御靈神社に鎮座する光秀の木像もやはり目が細い。目を細めるクセがあったとしたら、光秀は強い近視だったのかもしれません。

実際、若い頃から武術より学問を好み、兵法本から歴史書まであらゆる書物を読んで過ごしたと伝えられています。近視であった可能性はおおいにあるわけです。

光秀が好んで食したのは、今でいうところの「ちまき」。ちまきは、三角の形にした笹の葉にもち米を入れ、水に浸したあとにゆでたものが原型です。大量に作り置きをし、そのたびにゆでればよかつたので、当時は携帯食として武士たちに重宝がられました。つまり兵糧でもあったのです。中国から日本に伝わった平安時代には、もち米を植物の葉で包み、そのまま灰汁(あく)で煮込んでいました。こ

医学ジャーナリスト・医学博士

愛知医科大学客員教授・東京通信大学准教授

専門は公衆衛生学・医療安全・心理学・医療制度など幅広い。各大学で教壇に立つほか、医学番組の監修、テレビコメンテーター、講演活動をこなす。医学博士(愛知医大)、社会科学修士(東洋英和女学院大学大学院)。日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事、厚生労働省研究班委員、経済産業省委員会座長など。

「江戸健康学」(単著)、「戦国武将の健康術」(単著)、「忍者ダイエット」(単著)、「わたしのカラダを医学して!」(萌系医学解説本・監修)など著書多数。



植田美津恵

れは灰汁の持つ防腐作用や抗菌力を期待したためでしょう。笹の葉自体にも抗菌作用があるので、手軽な保存食として発展してきたものと思われます。

本能寺の変の4日前、光秀にちまきが献上されます。本来ちまきは、いぐさを解いて皿の上に笹の葉を広げ、少しずつ切って食べるのが礼儀というもの。ところがちょうどそのとき、まさに鬨(とき)の声が聞こえ、すわ敵かと慌てた光秀は笹の葉に包まれたちまきをそのまま口に入れてしまいました。慣れているはずの動作ができなくなっていたのです。

さらにさかのぼること半月前。家康の接待役を任された光秀は京都や堺から海の幸山の幸をふんだんに集め、贅を凝らした料理でもてなそうとします。ところが、信長は「魚が腐っている」と激怒。結局、光秀は饗応役

を解任されてしまいます。嗅覚障害はレビー型認知症の症状のひとつ。光秀は匂いに鈍感になっていたのかもしれません。

一連の、光秀らしくない行動は、近视に加え、嗅覚障害や物事の手順がわからなくなる症状を示す認知症だったのではないか、とする説があります。

光秀の年齢は定かではありませんが、信長より年上であったことは確かです。すでに60を過ぎた高齢者であれば、認知機能に障害が出てもおかしくはない歳です。

インテリ・イケメンだった光秀が、不可解な本能寺の変を起こした理由はいまだ謎ですが、もし脳の病気ゆえだったとすれば、現代人にとって、グッと身近に思える武将のひとりといえるでしょう。

